

# 「新しい傷」からのつながりに向かって      レイ モンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつ こと」における“accident”の時間性

著者	井出 達郎
雑誌名	英語英文学研究所紀要
号	41
ページ	1-26
発行年	2016-03-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00000494/">http://id.nii.ac.jp/1204/00000494/</a>

# 「新しい傷」からのつながりに向かって ——レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、 役にたつこと」における“accident”の時間性<sup>1</sup>

井 出 達 郎

## はじめに

誕生日に車にはねられた子どもが昏睡状態に陥り、いつとも知れないその目覚めを待ちつづける夫婦、その子どもの誕生日ケーキをとりにきてもらえないことに憤慨し、事情を何も知らずに嫌がらせの電話をかけつづけるパン屋——ふたつのメイン・プロットからなるレイモンド・カーヴァーの短編「ささやかだけれど、役にたつこと」(1983年)において、息子スコッティの突然の交通事故という悲劇に直面した父親ハワードが感じる次の思いは、「事故 (accident)」をめぐるこの作品が、何よりも「偶然 (accident)」という時間に関わっていることを示している。「それまで、彼はいかなる危機からも遠いところにいた。それがあることは分かっていた力から、運が悪い方へと向かい、風向きが突然変わるとき、人を損ない、打ちのめす力から遠いところに」(62)。ハワードの思いは、「それまで」、「突然」という語とともに、彼にとってこの事故が、明確な原因と結果の連鎖から

---

<sup>1</sup> 邦題はすでに一般的に定着している村上春樹訳を、その定着度の大きさも考慮し、そのまま採用している。テキストの本文については、村上訳を参考にしながらも、論旨との整合性のため、筆者が日本語に訳している。

なる安定した時間からいきなり切断され、予見不能な時間の只中に投げ込まれる出来事であったことを伝えている。予見不能な時間の感覚は、必ず目覚めるという医師の予測を裏切り、スコッティの死というかたちで貫徹される。その偶然としての事故は、なぜそれが起きたのかという原因に対する合理的な説明を彼らに決して与えず、どこまでも意味づけることができない傷を彼らに負わせる。だがこの作品に特徴的なのは、その傷をめぐる出来事が、ただ悲劇というかたちのみで終わっていない点にある。嫌がらせの電話の主がパン屋だと気がついた夫婦は、偶然によってもたされた子どもの死を、原因を物語れないままに、激昂しながら伝える。その言葉は、状況それ自体を明らかにするという点においてはきわめて不完全であり、事故／偶然に対する明確な意味づけを伝えることは決してない。しかし彼らは、その言葉による意味づけの不可能性それ自体を噛み締めるかのように、パン屋の焼いたパンをただ食べあうことによって、なぜそれが起きたのかを意味づけできないままに、ひとつのつながりへと導かれていく。そこには、事故／偶然そのものを伝えあうのではなく、その伝えあえなさを伝えあうことによって生み出されるつながりのあり方がある。本稿は、“accident”という主題から作品を読み返し、因果律によって意味づけられない傷としての出来事が、その伝えあえなさを伝えあうという逆説的なたちを通して、ひとつの媒介となってつながりを生み出していくことを明らかにする。

## 1. 作品における時間の主題についての再考——先行研究とその可能性

本稿の試みは、時間の主題から作品を読み解こうとしたハロルド・シュヴァイツァーの論考を引き継ぎ、その可能性の新たな一端を開こうとする

ものである。シュヴァイツァーは、論文「レイモンド・カーヴァー『ささやかだけれど、役にたつこと』における待つことと望むこと」において、作品が「待つ (hope)」という行為を繰り返し描いていることを指摘しつつ、その行為の始まりに含まれていた「予測 (prediction)」や「期待 (expectation)」がすべて無に帰す時点において、特定の対象を何も持たない「望む (hope)」という行為へと変容していく、という読み方を提示する。そして、最終的に登場人物たちの間に生まれる親密さについて、特定の望むべき何かを持たないで望むというその行為が、望む人間の自己を他者に限りなく押し広げていくからだ、という解釈を行っている<sup>2</sup>。

シュヴァイツァーが前景化した時間という大枠をそのまま引き継ぎつつ、本稿がそれを“accident”というモチーフに接続し直しているのは、「待つ」というモチーフから論じることで必然的に死角となってしまう時間のもう一つの様相を取り入れようとするためである。それは、過去という様相、特に、原因や理由を見いだす場としての過去という様相である。待つという行為にせよ、そしてそこから派生する望むという行為にせよ、シュヴァイツァーの取り上げる二つの行為はともに、ただ未来という一方向のみに向けられている。確かに、スコッティーの目覚めにしても、予約されたケーキの受け取りにしても、登場人物の意識が未来という方向に向けられているのは間違いない。しかし見逃せないのは、彼らはそうした未来への意識

---

<sup>2</sup> カーヴァー作品から時間の主題を見いだそうとする研究はまだ多くはないが、研究とは別の分野でその問題を示唆しているものとして、ロバート・アルトマン監督の映画『ショート・カット』(1993年)を挙げることができる。複数のカーヴァー作品を、ロサンゼルスというひとつの場所を舞台に群像劇の形式で組み合わせたこの映画は、個々の作品のプロットはそのまま採用しながらも、最後にロサンゼルスを大地震が襲うというかたちで終わらせている。そこで個々の作品を越えた登場人物すべてを襲う地震は、アルトマンがカーヴァー作品の中に「いきなり何かが起こる」という時間の感覚を読みとったひとつの証左とみることができるだろう。

の一方で、そもそもなぜこの事故／偶然が起きたのか、理由や原因は何だったのか、という問いに繰り返し直面させられていく点である。そこには、シュヴァイツァーが論じる時間のあり方が、過去という逆の方向においても同じように展開されていく。そもそも偶然とは、ハワードが「突然」という言葉で表したように、原因と結果で結ばれた因果関係とは無関係に起こることである。それゆえ、そこに原因を探ろうとする行為は、どこまでも挫折するほかはない。作品における時間の主題とは、予想や期待が実現されない未来の時間とともに、理由や原因が見いだせないこうした過去の時間にも結びついている<sup>3</sup>。

こうして時間の問題を“accident”というモチーフから捉えなおすことは、シュヴァイツァーが論じる他者への開かれについても新しい解釈を付け加えることになる。一方で、原因や理由の不在を何よりも特徴とする偶然という出来事は、なぜそれが起きたのかについての説明をどこまでも拒む。それゆえ登場人物たちは、そのことを合理的に他者に説明することが決してできない。偶然の存在論という問題を探究しているフランスの哲学者カトリヌ・マラブーは、精神分析において「トラウマ」と名付けられた精神的外傷が、抑圧された原因をつきとめることで回復されると考えられていることと対照させながら、予期せぬ偶然によって与えられた傷は、「物語化される可能性と相容れない」(Malabou 9)のものであると論じている。

---

<sup>3</sup> 原因を欠いた偶然としての事故は、カーヴァーの他作品にも繰り返し現れるライト・モチーフのひとつであるといつてよい。たとえば「レモネード」という詩は、息子の事故死という出来事について、「自分が車にレモネードの魔法瓶を取りに行かせたためだ」と苦しむ父親の姿を描いているが、その事故の原因についての思いは、最後には「地上に最初に植えられたレモン」にまで行き着くことになってしまう、という考えを提示している。いうまでもなく、体裁上は究極の原因に辿りついているその考えは、実際の原因にはどこまでいってもたどり着けないことの裏返しでしかなく、子どもの死という出来事の原因の不在をかえって鮮烈に伝えている。

「新しい傷」からのつながりに向かって

マラブーはその物語化できない傷を、「古い」精神分析が取り逃してきたものであるという意味合いを込めて、「新しい傷」と名づけている。マラブーの言う新しい傷は、他者への合理的な説明が不可能である点において、一見すると、つながりではなく、孤立をもたらすものであるように見えてしまう。だが、作品が描く夫婦とパン屋の関係は、そうした合理的な説明の不可能性を露にしながら、まさにそれを露にすることによって、ひとつのつながりへと導かれていく。時間の問題を“accident”と捉え直し、それをマラブーの「新しい傷」という考えに接続させる本稿が最終的に向かうのは、相互に伝えあうことが不可能であることを伝えあうことによって、かえってより強いつながりを生み出すというこの逆説的な可能性にほかならない<sup>4</sup>。

## 2. 予見可能な時間からの切断 —— “accident” の時間性

作品は、原因と結果の連鎖による確定的な時間の感覚を背景にしたうえで、その確定的な時間の感覚を突然切断させるかたちで偶然の時間を描いていく。冒頭は、その背景となる確定的な時間の感覚を、「予約」という行為を通して提示している。土曜日の午後にショッピングセンターのパン屋にやってきた母親のアンは、息子のスコッティの誕生日ケーキを予約する。「子どもが次の月曜日に8歳になる」とはっきりと告げながら行わ

---

<sup>4</sup> マラブーの新しい傷という考えへの着目と、それを伝えることをめぐる逆説的なつながりへの解釈は、熊谷晋一郎『ひとりで苦しまないための「痛み」の哲学』に収録された熊谷による大澤真幸との対談に多くを負っている。大澤は、マラブーの新しい傷を「痛み」という主題と結びつけ、痛みとは何よりも人に理解できないものであると特徴づけたうえで、「他者の痛みへの真の共感とは、それは私にはわからない、私はそこにどうしても到達できないということ、痛切に実感することのほうにある」（熊谷34）と述べている。

れるアンの予約は、具体的な日付とともにパン屋の「特別予約カード (the special order card)」(60) へと書き込まれる。そこで“order”という語とともに示されるのは、この予約という行為が、まだ到来していない未来という時間に対して、予見可能な「秩序」を与える行為であるということである。事実、この予約を行っている最中、アンが主観的に想像しているであろうその月曜日の情景が、あたかも客観的な事実であるかのように、地の文において描写される。「そのケーキは、月曜日の朝、できたての状態で、午後に行われる子どものパーティーに十分間に合うように用意されるのだ」(60)。いうまでもなく、この客観的な事実であるかのように語られる未来は、パン屋自身についても当てはまる。「用意される (be ready)」という受け身の構文が示すように、それはパン屋自身の意志や気まぐれといった不確定要素が入り込む余地のない、確定された予定として語られている。

この確定された時間を打ち崩すもの、それが、まさに確定されていた未来であったはずの誕生日に起こる“accident”である。誕生日となる月曜日の朝、午後にパーティーを控えながら、スコッティーは学校に行く途中に車にはねられる。この「事故」が「偶然」と不可避に結びついていることは、ただ語義的な意味の重なりばかりではない。それ以上に決定的なのは、その事故の「原因」が極めて不明瞭に描かれていることである。事故の直前、スコッティーの様子は次のように描写されている。「周囲に目を配ることなく、誕生日の少年は交差点の縁石を踏み外し、直後に車にはねられた」(60-61)。「周囲に目を配ることなく」という部分が示しているように、この描写は、はねられた側であるスコッティーの方にも何らかの過失があったことをほのめかしている。加えて、はねた側の運転手もまた、それを引き起こした決定的な原因としては描かれていない。事故の直後、運転

手は子どもが立ち上がるまでそこにとどまり、「ふらふらしているが、問題がないように見えた」(61) ことを確認したうえでその場をあとにする。はねられた側とはねる側の両方に対する描写は、単純な「加害者と被害者」という区分けにはなっておらず、どちらが原因で起こったのかという問いを、どこまでも曖昧にしている。原因が徹底的に不明瞭なこと、それがこの「事故」が何よりも「偶然」であることを伝えている。

確定されるべき時間が偶然の時間によって切断されるという出来事は、この事故をめぐる以後の成り行きのほとんどすべてと結びついている。二つの時間の相克、そして後者の時間による圧倒は、事故の直後のハワードの思いから鮮烈に伝わってくる。突然起きたこの事故に対して、ハワードはいったん、「合理的なやり方 (rational manner)」で対処しようとする。「彼は車の中で少しの間じっと身を置き、現在の状況に合理的なやり方で対処しようとした。スコッティーは車にはねられ、病院にいる。しかし、すべて元通りになるのだ (He sat in the car for a minute and tried to deal with the present situation in a rational manner. Scotty had been hit by a car and was in the hospital, but he was going to be all right.)」(62)。そもそも rational という言葉は、「原因」や「理由」にもとづいた思考法を意味する<sup>5</sup>。言い換えれば、それは原因と結果からなる時間を生きようとする態度にはかならない。ハワードが試みようとするその合理的な考え方は、この言葉の中の “was going to” という表現ににじみ出ているだろう。未来の事柄を表すこの be going to という表現は、will という表現と比べたとき、will が「思う、推測する、判断する」という主観的なニュアンスを含んで

---

<sup>5</sup> Longman Dictionary of Contemporary English は rational を次のように定義している。“rational thoughts, decisions etc are based on reasons rather than emotions.” (下線部は筆者)



いるのに対し、be going toの方は、現時点においてすでに「現実味」をおびており、「それはすでに計画また決定されたこと」というニュアンスを持っている<sup>6</sup>。その意味で、“he was going to be all right”と表現するときのハワードは、その文が表す未来の内容を、原因と結果で結ばれた確定的なものとして思い描こうとしている。

だがハワードの時間の合理化の試みは、この時点ですでに破綻しているといってよい。合理性が原因と結果の連結、すなわち、ある原因がある「ゆえに」それに伴う結果が生じるという時間の感覚であるならば、「すべては元通りになる」という結果には、その結果を生じさせるはっきりした原因がなければならない。ところがハワードのそれは、「スコッティーが車にはねられ、病院にいる」という部分以外に見当たらない。その部分は、自ら“but”という逆接の接続詞でつなげているように、「ゆえに」という合理的な連結で結ばれることは決してない。ハワードの「合理的なやり方」による事故への対処という試みは、合理的な文を作ることができないという皮肉な結果によって、かえって偶然という時間をいっそう際立たせているだけである。

時間の合理化の試みと偶然の時間による圧倒は、スコッティーへの病院の人々の対処に同じように見出すことができる。すでにシュヴァイツァーが指摘しているように、スコッティーの現状を診断し、脈や熱をカルテに書き込んでいく描写は、彼の体をひとつの物質として数値化し、物理的な法則が当てはまる予見可能な対象として扱っていることを示している<sup>7</sup>。それがハワードの言う合理的なやり方と正確に重なっていることは、彼らも

---

<sup>6</sup> Michel Swan, *Practical English Usage* の212-13頁, “future (2) : will/shall” および, “future (3) : going to …” の項目を参照。

<sup>7</sup> Schweizer の, 特に 10-11 頁を参照。

また“be going to”という表現で未来を語ろうとしている点に表れている。「フランシス医師が言っていたことを思い出してごらん。スコッティーは良くなると言っていたじゃないか (He said Scotty's going to be all right)」(64)。加えて、そのフランシス医師は、ではなぜ目覚めないのかというアンとハワードの疑問に対して、ひとつずつ丁寧な説明を加えていく。その答えは、表面的には、“be going to”というかたちで訪れるべき結果の原因となるべきものである。それはまさに、事故という出来事を偶然ではなく合理的なやり方で対処しようとする態度そのものである<sup>8</sup>。

その一方で、病院の人々が語るこうした確定的な未来は、やはり同じように偶然という時間によって打ち崩される。「スコッティーは良くなる」と“be going to”を使って述べたフランシス医師は、すべての説明を終えた後、「ただもう少し時間が必要というだけなのです (It's just a question of a little more time now)」(67)と答える。スコッティーを数値化する態度にとって皮肉なことに、「もう少し」を意味する“a little”という表現は、不可算名詞に用いられる語にはかならず、それが意味する内容とは裏腹に、その少しの時間が何よりも数値化不可能であることを表している。「いつ」が決して予見できない偶然の時間は、文字通り「時間の問題」として、合理的なやり方の上につねにのしかかっている。

スコッティーの死をめぐる描かれる偶然の時間は、もうひとつのメイ・プロットであるパン屋の電話においても中心的な問題となっている。ハワードとアンが個別に一時的に帰宅するとき、それぞれの帰宅時に電話

---

<sup>8</sup> こうした「合理的なやり方で対処しようとする態度」の描写の中に、病院側の人々の態度への批判を読み込むことは大きな誤りであろう。前述したように、作中の医師たちの言い方はもともとハワードがしていた言い方である。それはむしろ、偶然という時間がもたらす不安の中にいる人々に対して、とらざるをえない態度として描かれている。

「新しい傷」からのつながりに向かって

が鳴りかかってきて、ケーキやスコッティーのことを忘れてしまったのかとだけ伝えて切れてしまう。ハワードとアンの視点から語られるその行動は、表面的には単なる嫌がらせにしかみえない。しかしパン屋の視点から出来事を捉え直せば、ケーキをとりに来てもらえないという状況は、確定されていたはずの未来が達成されないという点で、アンとハワードが経験している“accident”にそのまま重なっている。さらに、スコッティーのことだけで誕生日のケーキの予約など忘れてしまっていたアンとハワードは、それがパン屋だと気がつかない。そのためにパン屋もまた、とりに来てもらえないという状況の原因が全くわからない。予見可能な時間からいきなり切断されることで、パン屋もまた“accident”の時間を強いられている。

このプロットが偶然の問題に関わっていることをより強調しているのが、「電話」という行為である。ハワードとアンがそれぞれ個別に一時的に帰宅するとき、ちょうどそのタイミングにあわせて、パン屋からの電話がくる。だがこれもまた、ちょうどそのタイミングにあったようにみえるのは、あくまでもハワードとアンの視点からみた場合である。パン屋の視点から捉え直せば、実際は何度も電話をかけつづけていたのであり、アンやハワードからはちょうど帰宅のタイミングでかかってきたかのようにみえる電話は、その数ある中のひとつにすぎない。このことは、そもそも電話という行為そのものが、それ自体で偶然という時間に結びついていることを示唆しているだろう。受ける側からすれば、それは予告なしに突然かかってくる。そしてかける側にしてもまた、それに出てもらえるかどうかは、受ける側がたまたまそこにいるかどうかにかかっている。その意味で電話を繰り返すパン屋は、その行為だけで偶然の時間に関わり続けている。

「新しい傷」からのつながりに向かって

二つのメイン・プロットにまたがって描かれ続ける“accident”の時間性は、スコットリーの死によって決定的なものになる。いつまでも目覚めなかったスコットリーは、病院側が手術をする決定をした直後、アンとハーワードの前で突然目を開くものの、その目はすぐに閉じられ、最期の息を吐き出し、そのまま息絶えてしまう。“be going to”で語られていたはずの目覚めと同時におとずれるこの死は、予見可能な時間と偶然の時間のコントラストを改めて強烈に提示しながら、後者による前者の切断を痛切に描き出している。

### 3. 合理的な説明を拒む事故／偶然——「新しい傷」

こうして描かれ続ける“accident”は、原因や理由の徹底的な欠如という本質によって、「なぜそれが起こったのか」という問いを登場人物たちに突きつけながら、合理的な説明づけを決して許さない。彼らは、それについて何かを語りたいと強く願いながら、何も言えずにただ見つめ合ったり、中身のない感情的な言葉を爆発させたりすることしかできない。それは、マラブーのいう物語化を阻まれた、「新しい傷を負った人」の姿に正確に当てはまる。“accident”の時間性の問題は、この合理的な説明を拒む傷の問題へと結びつけられていく。

合理的な説明を拒む「新しい傷」としての事故／偶然は、アンが病院の中で出会う黒人の家族とのエピソードの中に鮮明に描きこまれている。病院から一時的に帰宅しようとするアンは、途中の「待合室（waiting room）」において、家族の一員の手術の結果を「待っている」黒人の家族に出会う。病院の関係者に間違えられて話しかけられたアンは、それが誤解だと分かった後も立ち去ることができず、なぜか「説明する必要がある

ように思われた」(74)という気持ちにかられ、自分の息子が交通事故にあったこと、目が覚めるのを待っていることを彼らに伝える。それに対して、家族の父親であると思われる男が答える次の事情は、アンの事故が孕んでいた偶然という時間の感覚をはっきりと共有している。「周りにいたやつらの言うには、あいつはただ立って周りを見ていただけだったってことだ。誰ひとり迷惑をかけちゃいない。だけど最近じゃそんなことは何の意味も持っていないんだ。今あいつは手術台の上にいる (Now he's on the operating table)」(74)。台詞の一つ一つをとってみれば、男は事情をきちんと順序立てて説明しているようにも見える。しかし男の説明は、「何の意味も持っていない」と自ら言っているように、現在の状況に対してははっきりとした原因を見いだすことができていない。“Now”という言葉から始まる文が表す一連の事情の帰結は、それ以前の成り行きと全く無関係のまま、過去から切断された偶然の時間としてある。

この意味づけできない傷は、黒人の母親の姿にも痛切に刻み込まれている。黒人の男の説明が終わった後もその場を動くことができないアンは、その家族の母親と思われる女性が唇を動かし、何か言葉を発しようとしているのを目撃する。しかし、“Ann Saw the lips moving silently, making words” (74)という現在分詞の構文がはっきりと示しているように、彼女の唇は言葉を紡ぎだそうとしながら、その行為を最後まで完了させることができない。事実、アンは彼女から発せられようとしている言葉が何なのか尋ねたいという思いにかられながらも、結局はわからないまま終わってしまう。黒人の父親の説明が徹底的に因果関係を欠いていたのと全く同じように、母親も意味のある言葉をつくりだすこと、その事故を意味づけることができないままにいる。

アンが黒人の女性にみる事故の合理的な意味づけの不可能性は、そのま

まアン自身にも正確に当てはまる。黒人の女性がどんな言葉を発しようとしているのかを尋ねたいという思いにかられると同時に、アンは自分の方も息子の事故を説明したいという思いを抱く。「彼女は自分の事故について彼らに何か言いたかった。もっとスコッティーのことを話したかった。それが月曜日に、彼の誕生日に起こったということ、そして今もなお意識が回復していないこと」(74)。そうした思いにかられながら、「しかし彼女はどのように話し始めたらよいのかわからなかった(Yet she didn't know how to begin)」(74)。ここでアンが感じる「どのように始めたらよいか分からない」という状態は、話すという行為についてのアンの個人的な困難であると同時に、偶然としての事故が孕む原因の不在というあり方にそのまま重なっている。黙って見つめる以外には何もできずにその場を去るアンは、黒人の女性と同じように、意味づけすることができない傷を負っている。

この意味づけできない傷は、スコッティーの死という出来事において決定的なものになる。その予想外の死に際し、医師はそれが非常に稀な、レントゲンにも映らないほど見つかりにくい血管閉塞であったと、アンたちに原因を告げる。ここでもやはり、事故／偶然を合理的に説明しようとしてなされるその原因の説明は、アンに対して何も意味のあるものにはならない。原因を説明した後、「さしあたって何かできることはありますか」と言う医師に、アンはただ「彼の言葉が理解できないかのように」(81)見つめ返すだけである。原因を述べる医師に対するアンの「理解できない」という反応は、アンにとってその出来事が、原因と結果からなる因果関係による説明ではとらえられるものではないことを示している。

因果関係によって意味づけできない傷はハワードにも同様に刻みこまれる。アンに代わって医師の説明を受け続けるハワードは、医師から「明確

にさせなければならないこと」(81)のためにまだしなくてはならないことが残っていると言われ、それが検死解剖であることをすぐに察する。その解剖という行為は、それまで医師たちが示してきた態度の延長線上にある、原因を探り当てるといふ行為にほかならないだろう。そうした原因を探り当てようとする行為に対して、ハワードもまた拒絶反応を示す。『『わかりました』とハワードは言った。それから彼は言った。『ああ、ちくしょう。だめだ、受け入れられません、先生。自分にはできない、できないんです。とにかくできないんです (I just can't)』』(81-82)。検死解剖という原因を探る行為について、事故が起きた当初に「合理的なやり方」で対処しようとしたように、ハワードはいったんはそれを受け入れようとするも、すぐに自分の言葉を撤回し、「とにかく理解できない」と言い放つ。その“I just can’t”という表現は、かつて自身が言った「合理的なやり方」という態度と著しい対照をなしながら、自分自身を含みこんだ現状に対して何ら説明を与えることができない物語化の不可能性を、文字通りただその不可能性だけを伝えている。

こうしてスコッティーの死をめぐって繰り返し描かれる意味づけできない傷は、もうひとつのメイン・プロットであるパン屋の電話をめぐっても同じように描かれている。一見するとパン屋の行為は、「予約したケーキをとりにきてもらえない」というはっきりとした理由があるように思えるかもしれない。しかしパン屋の行為に何よりも特異なのは、その一見もつともらしい「理由」が常に不明瞭なままに引き伸ばされつづけ、最後まで判然としないままに終わってしまう点にある。電話の主が誰なのか分からない段階において、ハワードとアンはなぜ電話をしてくるのかとその理由を尋ねる。それに対してパン屋はただ「スコッティーのこと」とだけ答え、それ以上の答えを言うことがない。スコッティーの死の直後、家に帰った

アンたちのところへかかってくる電話はその際たるものである。「どうしてこんなことができるの (How can you do this?)」と激しく怒鳴るアンに対して、「スコッティーのことだ」, 「スコッティーのことを忘れちゃったのか」とだけ答え、そのまま電話は切られてしまう。いうまでもなく、文脈からみれば、アンの放つ「どうして (how)」は修辞疑問として明確な答えを要求する通常の疑問文ではなく、パン屋の言葉もまたケーキを取りにきてもらえない苛立ちから発せられたものであるため、会話自体に特に不自然さはないように思えるかもしれない。しかし少なくとも、理由を探りだそうという行為を頓挫させるという点において、この場面はスコッティーの死をめぐる説明のエピソードの反復になっている。事実、最終的に直接対面し、その電話について述べるパン屋の次の説明でも、彼が電話をして具体的に何をしたかったのかは、きわめて不明瞭なままである。

あんたと言い争う気はないよ、お嬢さん。それならあっちにあるぜ、腐りかけでな。あんたに言った値段の半分で持っていったいいぜ。いや。そもそも欲しいのか？ ならくてやるよ。俺には何の役にもたたないし、今となっては誰の役にもたたないからな。あんたが欲しければそれでいいし、欲しくないんだったらそれでもいい (If you want, okay, if you don't, that's okay, too)。俺は仕事に戻らなくちゃならない。(86)

“If you want, okay, if you don't, that's okay, too” という二者択一として全く意味をなさない文は、パン屋の電話の原因を遡及的に突き止めようとする試みをどこまでも宙吊りにしてしまう。最後に付け足される「仕事に戻らなくちゃならない」という言葉もまた、それではなぜわざわざ時間を割いて何度も電話をかけてきたのか、という疑問を誘発せずにはいられない。一見すると単なる嫌がらせにしかみえないパン屋の電話は、この原因の不



#### 「新しい傷」からのつながりに向かって

在という点において、もうひとつのメイン・プロットと正確に呼応している。

パン屋は単に口にしていないだけで、本心ははっきりとした理由を持っているではないか、その意味でスコッティーの死という悲劇とパン屋の電話という嫌がらせを同列に置くのはいきすぎではないのか、という反論もありうるだろう。しかしここで見逃してはならないのは、パン屋の電話という行為の裏側にあるのが、予約したケーキをとりにもきてもらえなかったという、確定された未来の不成立である点である。一方でスコッティーの死をめぐるプロットは、医師たちが確定的なニュアンスで予告した目が覚めるという事態が成立しなかったこと、偶然という時間に直面させられることを背景としていた。そしてこのパン屋の電話をめぐるプロットもまた、特別予約カードに明記されたパンをとりにくるという事態が成立しなかったこと、すなわち、同じように偶然という時間との直面を背景としている。理由が明確に言葉にされないことに加え、この偶然の時間との直面においてもまた、ふたつのプロットはぴったりと重なり合っている。その意味で、見かけの印象とは裏腹に、嫌がらせのような電話をしているだけにみえるパン屋もまた、意味づけできない傷を確かに負っているのである。

#### 4. 共有できないことを共有すること

##### ——「新しい傷」からのつながりに向かって

原因や理由を合理的に説明できない“accident”は、それを他者と共有できない傷、マラブーのいう「新しい傷」を登場人物に負わせる。それはどこまでもその合理的な物語化を拒むものとしてある。この新しい傷を負った人々が表すことができるのは、その共有の不可能性だけでしかない。し

かし作品は、そうした新しい傷を負った人々がその不可能性を露にすると  
き、その傷それ自体ではなく、その共有の不可能性自体を感じ取る人々の  
姿を描き出していく。そこから立ち現れてくるのは、その共有できないと  
いう否定的な状態が、共有できないことを共有するという逆説的なあり方  
によって、他者とのつながりへと反転していくという特異な出来事である。

意味づけできない傷によって、伝えあうことの不可能性によってつなが  
りが生まれるという逆説は、アンと黒人の家族が会合う場面に暗示的に用  
意されている。前述したように、彼らはここで、いったんはお互いが渦中  
にある事故／偶然について順番に伝え合おうとするのだが、黒人の男性の  
「そんなことは何も意味しない」という言葉や、アンの「どうやって始め  
たらいいのか分からない」という言葉から読み取れるように、それぞれの  
説明は明確な原因を徹底的に欠き、その言葉それ自体について共感を得る  
ことは決してない。彼らはそれぞれに自分のことを話ただけであり、そ  
のまま会話は途切れ、さらに深く知りあうための意思伝達らしきものは何  
ひとつ発生しない。彼らは、いわば、お互いの事故／偶然が伝えあえない  
というそのこと自体を伝え合っただけである。だがここで重要なのは、伝  
えあうことの困難それ自体が、アンをその場にとどめ、逆説的に、伝えあ  
えないこと自体を伝えあうというつながりを生む契機になっていることで  
ある。一方通行にもみえるそれぞれの会話が終わった後、確かに彼らはそ  
れ以上言葉をかけあうことはないのだが、黒人の男は黙ってアンを見つめ、  
アンもまた家族を見つめつづける。そして、母親らしき女性が言葉になら  
ない言葉を発しようとしているのを認めたアンは、自分自身の中にもまた、  
言葉に出しては伝えられない次の思いが湧き上がってくるのを感じる。「彼  
女は今の自分と同じように待っているこの人たちともっと話がしたいと  
思った。彼女は恐れていたし、彼らもまた恐れていた。彼らはそのことを

共有していた」(74)。ここには、「待つ」ことしかできないこと、すなわち、確定された未来ではなく、偶然という意味づけが不可能な時間に生きることを余儀なくされた者同士としてのつながりの契機がはっきりと含まれている。一方で、「話をしたいと思った」という思いが現実には話をできていないことを表しているように、彼らは事故／偶然を他人に伝えるかたちにすることができない。しかしその一方で、その伝えることができないという困難それ自体は、はっきりと伝わりあっている。

伝えあえないことを共有するというあり方は、お互いの子どもが死を迎える場面において、そのまま反復されることになる。黒人の家族に出会った後、少しだけ家に帰った後に再び病院に戻ってきたアンは、待合室にすでに家族がいなかったことをみてとり、看護師からフランクリンが亡くなったことを知らされる。死に際して、アンにはそこにいない家族と話をする手段が何一つないばかりでなく、それに関するアンの内面描写も一切描かれていない。そこには、死という突然ふりかかる時間の中で、それを伝えあうことの困難だけが露にされている。その困難さは、アンの息子のスコッティーの死においてより強いかたちで繰り返される。亡くなったスコッティーだけを残して病院を後にするアンは、「彼を残してはいけない」と思わず声に出して言うてしまうが、その言葉があまりにもありきたりな「突然の暴力や死によって人々が啞然とする」(81) テレビ番組の台詞のようであることに気がつき、「こんなのってない (how unfair it was)」(81) と愕然とする。“fair”の否定形であるその言葉は、自分の中にこの出来事を「適切に」表現する言葉がないことを伝えている。そして「自分自身の言葉が欲しい」(81) と思うものの、やはりその言葉を見つけることはできない。ここでアンは、スコッティーの死という出来事について、他者ばかりではなく、自分自身に対してさえも伝えることができないでいる。しかし、こ

うして二重に強められるかたちで伝えることの困難さに直面するまさにそのとき、言葉を発しようとして発することができなかった黒人の女性をアンは思い出す。『『できない (No)』と彼女は言った。するとなぜか、頭を肩にもたげていたあの黒人女性の記憶が蘇ってきた。『『できない (No)』と彼女はもう一度言った』(81)。アンがここで発する“*No*”という言葉は、語が本来もつ否定の意味とは裏腹に、言葉によって伝えあうことができなかった相手の記憶を呼び覚ます触媒として機能している。何よりも見逃せないのは、そこで呼び覚まされる相手の姿もまた、まさに言葉による伝達の不可能性をそのまま伝えるものになっている点である。言葉を発することができないその姿を思い起こした上で繰り返される“*No*”という否定語は、それがアン自身に向けたものなのか、それとも黒人の女性の気持ちをアンが代弁したものなのか、もはや区別ができないものになっている。意味づけられた物語として伝えあうことができなかったふたりは、そのできないという否定の状態を媒介にして、別のつながりのあり方を示している。

意味づけできない傷からのつながりは、ハイライトというべき、最後のパン屋との場面の正確な伏線になっている。電話の主がパン屋であることによりやく気がついたアンとハワードは、店まで車を走らせ、そこで激昂しながらパン屋にスコッティーの死を知らせる。「パン屋はなんでも知ってるわけじゃない、そうでしょう、パン屋さん？ でも彼は死んでしまったの。死んでしまったのよ、このくそつたれ野郎！」(86)。激昂しながら放たれるアンの台詞は、その感情の強さとは反比例するように、まさに彼女が病院で感じたように、「突然の暴力や死によって人々が啞然とする」(81) ありきたりなテレビ番組の台詞以上のものにはなっていない。事実、彼女はすぐにその無力さを認めるかのように、そのときとほぼ同様の、「こんなのってない (*It isn't fair*)」(87) という言葉を繰り返す。だが、その

合理的な説明を徹底的に欠いた言葉は、状況の詳細が全く不明なままであるにもかかわらず、パン屋の態度を一変させる。その変化において何より重要なのは、彼がアンたちの悲劇を単純に理解し、受け入れたというわけでは決してないことである。それまでの挑発的な態度とはうってかわり、アンとハワードに向けて語り始めるパン屋は、彼らの事故に対して、ただちに質問したり共感したりすることはしない。代わりに彼は、自分はただのパン屋であること、何年か前は違う人間だったことなど、自分自身のことを語り始める。そして、自分に子どもがいないこと、そのため、「自分にできるのはただ気持ちを想像することだけ (so I can only imagine what you must be feeling)」(87) でしかないことを伝える。これはいわゆる共感の言葉ではない。むしろ、共感することの不可能性を伝える言葉である。そして、彼らとは別の人間であること、ただのパン屋であることを強調するかのようになり、彼らにただパンを差し出す。そこには、自分は子どもを失った夫婦ではなく、自分はパン屋であるという他者との違いに対する認識を通して、共有できないものがあることを共有することがつながりの契機になっていることが示されている。スコッティーの死を伝えられたパン屋が、自分のパン屋として職業を天職として強く認識し直すという一見すると不自然な構図は、共有できないことを共有するというつながりのあり方を極めて正確に映し出している<sup>9</sup>。

---

<sup>9</sup> またここには、偶然という時間のモチーフを描く際に作品が「電話 (calling)」というモチーフを要請した必然性を違ったかたちでみることができるようになる。作中でも使われる“calling”には、「電話」に加えて「天職」という意味が含まれており、この場面で「自分がパン屋だ」と強く認識するパン屋は、まさにその意味での“calling”と重なっている。その天職としての“calling”が本論文の主題にとって重要なのは、その意味がもともと「神の呼びかけ」から来るものであり、それゆえに「いつ」それがくるのかはわからないという点で、偶然という時間と強く結びついている点である。この天職としての“calling”の意味については、2013年度東北学院大学「英米文学講読Ⅱ」の授

共有できないことを共有するつながりは、彼らがパンを食べながらする会話についての特異な描写の仕方、いわゆる自由間接話法による描写の仕方と不可避に結びついている。

彼は話した。子どもがいない、こうした年月がどのようなものだったかを。オーヴンを何度もいっぱいにし、何度も空にする日々を繰り返すこと。彼が作ったパーティーのための食べ物、祝い事のための食べ物。指の付け根ほどの深さもあるアイシング。ケーキにさす小さなウェディング・カップルの人形。それらは何百という数にも、いや、今では何千という数にまでなるだろう。誕生日ケーキ。そのすべてのキャンドルが燃えているところをちょっと想像してみてください。彼は必要とされる仕事をしているのだ。彼はパン屋だった。花屋でないことを嬉しく思った。人々に食べ物をつくるほうがいい。この匂いはどんなときだって花よりもいいのだから。(88-89)

一方で、「彼は」という三人称で始まる一連のパン屋の話の描写は、最後まで引用符がどこにもないように、かたちのうえでは一貫して間接話法で語られている。その一方で、「それらは何百という数にも、いや、今では何千という数にまでなるだろう (Hundreds of them, no, thousands by now)」という否定文や、「ちょっと想像してみてください (Just imagine all those candles burning)」という命令文にみるように、本来であれば直接話法で語られるべきパン屋自身の発言が、そのままのかたちで含みこまれている。ここには、語り手と同じ三人称の位置にいるアンとハワードと、一人称の立場から語っているパン屋とが、一方で距離を置きながら、同時に分かちがたく結びつくという状態が現出している。重要なのは、それが単なる「混合」にはなっておらず、あくまでも距離をもったうえでのつながりになっ

---

業において、佐久間美希から指摘があった。

### 「新しい傷」からのつながりに向かって

ていることだ。言語から「他者」の問題について考え続けた思想家のミハイル・バフチンは、この自由間接話法（バフチン自身の言い方でいえば、疑似直接話法）を取り上げ、それを「混合」とする定義は間違いだとし、その理由を以下のように述べる。「この現象は、ふたつの形態のたんなる機械的な混合や算術的足し算ではなく、他者の発話を能動的に知覚する、まったくあたらしい積極的な傾向であり、著者のことばと他者のことばの相互関係の力学の特殊な一方向だからである」（バフチン 224）。バフチンの説明は、作品の自由間接話法の説明であると同時に、登場人物たちの間で生まれる特異なつながりのあり方そのものにも光を当てている。アンとハワードがスコッティーの死を語り、パン屋は自らの職業について語るとき、お互いの言葉が混合というかたちで共有されることは決してない。だがその言葉は、共有されることが不可能であることを伝えあうことによって、一方で三人称的な距離をとりながら、同時にかぎりなく一人称的な近さをも呼び寄せていく。作品の最後に登場する自由間接話法の場面は、その「相互関係の力学の特殊な一方向」としての、共有できないことを共有することから生まれるつながりをそのまま表出している。

### おわりに

「彼らが話し続けているうちに夜は明けていった。心地よい、淡い光の色が、窓から中に入ってきた。それでも彼らはその場を離れようとは思わなかった」（89）。この終わりの文で描写される夜明けの風景は、時間の主題をもう一度思い起こさせるように、小さな“accident”を含みこんでいる。冒頭の誕生日ケーキを予約する場面において、もともとパン屋の日常は次のように描写されていた。「彼は仕事場にやってきて、パンを焼きながら

一晩中そこにいるだけの毎日だった。だから急ぐことなど何もないのだ (He'd just come to work and he'd be there all night, baking, and he was in no hurry)」(60)。習慣を表す *would*, 「ただそれだけ」を意味する *just* という語, そして「彼」という人称, そこから伝わってくるのは, パン屋が予見可能な時間をひとりで生きていたということである。パンを食べながら朝を迎える三人は, 「彼 (He)」から「彼ら (They)」という人称の変化とともに, それまでのパン屋が生きていた時間とは違う時間を生きている。

こうして作品は “accident” という時間性を最後まで描き続ける。それはそれまでの原因と結果の連鎖からなる時間から人々を突然切り離す。はっきりとした原因や理由なしにおとずれるその出来事のなかで, 彼らはそれを他者と共有するための物語にすることができない。しかしその共有の不可能性は, ただ立ちすくんで見つめ合い, 不完全な言葉を放つことしかできない中で, その不可能性を共有するという, 別のつながりを生み出していく。「小さな, よきもの」というパン屋が最後に口にする, それ自体では極めてつたなく思える言葉は, まさにそのつたなさゆえに, 彼らの間に生まれたつながりの正確な表現になっている。

## 引用文献

- Altman, Robert, dir. *Short Cuts*. Fine Line, 1993. Film.  
Carver, Raymond. “Lemonade.” 1989. *All of Us : Collected Poems*. New York : Vintage, 2015. Kindle ebook file.  
———. “A Small, Good Thing.” *Cathedral*. 1983. New York : Vintage, 1989. Print.  
Malabou, Catherine. *The New Wounded : From Neurosis to Brain Damage*. 2007. Trans. Steven Miller. New York : Fordham UP, 2012. Print.  
“Rational.” Def. 1. *Longman Dictionary of Contemporary English*. 6<sup>th</sup> ed. 2014. Print.



「新しい傷」からのつながりに向かって

Schweizer, Harold. “On Waiting and Hoping in Raymond Carver’s ‘A Small, Good Thing.’” Ed. Vera Kalitzkus and Peter L. Twohig. *The Tapestry of Health, Illness, and Disease*. New York : Rodopi, 2009. 7-20. Print.

Swan, Michael. *Practical English Usage*. 3rd Ed. Oxford : Oxford UP, 2005. Print.

熊谷晋一郎『ひとりで苦しめないための「痛みの哲学」』青土社, 2013 年。Print.

ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学——言語学における社会学的方法の諸問題』桑野隆訳。1989 年。Print.

# Toward Solidarity through “New Wounds” : The Nature of Time of Accident in Raymond Carver’s “A Small, Good Thing”

Tatsuro Ide

## Abstract

This paper examines the nature of time of accident in Raymond Carver’s 1983 short story “A Small, Good Thing” to reveal that the story offers a new possibility of solidarity through “new wounds,” a notion proposed by French philosopher Catherine Malabou that denotes a kind of wounding that cannot be explained in terms of causality. The story features two main parts both inseparably connected by accident. In the first part, a small boy named Scotty is hit by a car on his eighth birthday and falls into a coma ; because of this accident, his parents Ann and Howard are forced to wait for Scotty to awake from coma without knowing when it will happen. In the second part, a baker, who took the order for Scotty’s birthday cake, makes crankcalls to the family repeatedly because nobody has come to fetch the cake ; thus he becomes also involved in the accident in that his expectation is left unfulfilled without reason. This nature of time of accident is highlighted when Scotty suddenly passes away against the parents’ expectation. Although the parents attempt to deal with the situation “in a rational manner,” an expression Howard uses, they are incapable of giving any rational explanation for the accident. Unlike

the psychoanalytic concept of trauma, in which a patient is supposed to recover from a mental wound by fantasizing it to create a “story” that will come to make sense for the patient, this “new wound” deprives the parents of the possibility to communicate it to others. Because the accident is characterized by the absolute absence of rational meaning, the parents only reside in exposing themselves to the impossibility of communication. In the end, however, the impossibility of communication for the couple emerges as a new possibility of solidarity. When the parents revile the baker with violent and emotional words devoid of rationality, the baker accepts their impossibility for giving any rational explanation for the accident. While still remaining incapable of making the accident a “story” in the psychoanalytical sense, “the newly wounded” ultimately reach a form of solidarity by communicating the impossibility of communication.